【水の作文大賞】

未来の水へ、私達にできること

真和中学校　一年　橋本　咲喜

「ああ、疲れたなぁ。癒されたい。」

そう思うと、私は必ず決まって行きたくなる場所があります。それは江津湖です。江津湖は、熊本県中部、熊本市南東部にある湖で、周囲約六キロメートル、面積約五十ヘクタール、最大水深二・六メートルのひょうたん形をした湖です。江津湖は、上江津湖と下江津湖に分かれています。四季に関係なく、年間水温が十九度から二十度に保たれています。

私は江津湖で水遊びをするのが好きで、そこから水の大切さや、ありがたさを知り、また水辺に生息する生き物たちに触れ、自然を学び、自然と戯れ幼少期を過ごしました。

まだ肌寒さを感じる早春でも、水の中へ入ることもあります。江津湖の水の温度は、年間を通して一定ですから、冷たくないのです。むしろ温かく感じ、何とも不思議な感覚になります。

五月末頃からは、夜になると蛍が飛び交います。熊本市内で蛍が見られるなんて、とても贅沢です。枕草子を書いた清少納言に想いを馳せます。清少納言も私と同じように、ぼんやりと光って飛んでいく蛍を見て綺麗だなぁと思ったのだと思うと、時代を超えても変わらぬ自然の奥深さを感じます。

秋には、湖周辺の木々の紅葉を楽しみ、風の音や虫の鳴く音に切なくなり、やがて訪れる冬に少しずつ近づいていることを感じます。湖には水遊びする小さな子どもたちの姿は消え、代わりに、夏には聞こえなかった水のせせらぎの音が、しっかりと聞こえてきます。

そして冬。毎年江津湖に飛来する鳥たちが冬の到来を知らせてくれます。初冬の早朝には、湖面から立ち昇る蒸気霧が湖に浮かぶ鳥たちのシルエットを綺麗に引き立て、映画のワンシーンのようです。この現象は湖霧というそうで、強い冷え込みが起こると発生するそうです。水の国熊本を代表する江津湖の水は、加勢川に流れ、やがて緑川と合流して海に流れていきます。

私の父は農業を営んでいます。米や、筑陽茄子という種類の茄子を何十年も作っています。農業で使用する水は、近くの加勢川から引いたり、地下から汲み上げています。加勢川の水を使うということは、江津湖の湧き水も含まれます。

「熊本の野菜は美味しいね。」

「こんなに美味しい野菜を食べられるなんて羨ましい。」

と県外の方に言われるたびに、当たり前に食べてきた私は幸せ者だと実感します。水は作物を育てるのに、切っても切れない関係であることは言うまでもありませんが、その水にこそ、作物に命を宿してもらう鍵だと私は思うのです。

きれいな江津湖を守る為、美味しい米や野菜を作ってもらう為、私は小学生の頃からしている事があります。それは江津湖周辺の清掃です。江津湖に行く時には必ずビニール袋を持って行き、帰りにはゴミや空き缶などを拾いながら帰ります。ゴミが多い日には、四十五リットルのポリ袋一杯になることがあります。たくさんのゴミを見て、また綺麗になった江津湖　見て、少しでも自分なりに大好きな江津湖に恩返しができているのではと思うと、清々しい気持ちになります。更にはこの江津湖から湧き出る水が、ゆくゆくは私の家の田畑へと流れて、大地を潤して作物を育ててくれることを考えると、清掃せずにはいられないのです。清掃を続けることは、容易ではありませんが、続けていこうと思う気持ちを持ち続けていくことが大切だと感じています。

今年もまた、田植えの時期がきました。代掻きされた水田を見ると江津湖を連想し、茄子や米も、子どもの様に愛情一杯に育てる父への感謝の気持ちが湧き上がってきます。今年も豊作であることを、心から願っています。